

# 権力に対して「虚偽」を語る

## — ダビデの王位を救った政治的陰謀 —<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット  
日原広志(訳)

これから、聖書のサムエル記に詳述されているダビデ王の生涯における劇的な出来事について考察したいと思います。この文脈を考えると、宗教的な道徳物語の一部として読むことが伝統的です。ダビデ王は、イスラエル統一王国の王にまで上り詰めるという大成功の後、権力の誘惑に屈しました。彼は、ヘト人ウリヤという小隊長の妻バト・シェバを寝室に呼び入れ、彼女が妊娠すると、事態の隠蔽に躍起になり、戦場でウリヤが殺害されるよう手配します。その後、彼はバト・シェバと結婚します。神から選ばれた立場〔の職権〕<sup>2</sup>を濫用したこの行為に対して、ダビデは将来、彼自身の家族の悪行を通して、神から罰せられるであろうと警告されます(サムエル記下12:11)。これらの結果の一つが、息子アブシャロムによるダビデに対する反乱の〔一時的〕成功です。ダビデは数人の忠実な家臣を連れてエルサレムからどうにか逃げ出します。本講演では、このエピソードと、ダビデがアブシャロムに対して形勢を逆転することに成功した方法について考察していきます。

しかし、詳細に入る前に、サムエル記の他の側面を認識しておくことは有益です。第一に、サムエル記は小説のようなテンポと深さで見事に書かれており、主要人物たちの性格描写は、彼らの動機や振る舞いについて絶え間な

---

1 訳注：これは2022年11月25日、Zoomオンライン会議方式で行われた西南学院大学学術研究所主催神学部共催学術公開講演会の公開講演である。原題は、“Speaking ‘Untruth’ to Power: The Political Intrigue That Saved King David’s Throne”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

い推測を呼び起こすに十分です。しかし、この書は、政治的リーダーシップの役割と課題についての研究としても読むことができます<sup>3</sup>。イスラエルは世襲の君主制を築きつつあり、また苦痛に満ちた争いの種となる出来事を通して、その妨げとなるかもしれない陥穽、個人的野心、軋轢に気付きつつあるところです。王位継承などの問題はどのように解決されるべきでしょうか。そして何よりここが、王はいかにして王たる役割への公的な諸要求と、私生活における諸々の責任、課題、感情的な要求とを調和させるのかという、ダビデの個人的な悲劇が演じられたところなのです。

バト・シェバの話の直後の章でアブシャロムが紹介され、ダビデの悲劇的で個人的な物語の始まりが導入されます。ダビデには何人かの妻があり、イスラエル王国全体の王位に就く以前、7年間治めたヘブロンで6人の息子が生まれました。長男はアムノンで、彼の行動が、私たちが以下にて遭遇する悲劇の引き金となります。二番目の子はキルアブと呼ばれ、ほとんど登場しません。三男はアブシャロムで、おそらくは政略結婚でしょうが、ゲシュルの王タルマイの娘マアカとの間に生まれました。四男のアドニヤは、ダビデの死期が迫っているときに、今度は自分の番とばかりにクーデターを起こして王になろうとしますが、ソロモンを支持する者たちによってあえなく敗北することになります。

アムノンはダビデの長男として、おそらく父の後を継いで王になるように育てられたと思われます。しかし、アムノンについて私たちが知るまさに最初のことは、彼が腹違いの弟アブシャロムの妹タマルに夢中になっていることです。アムノンはタマルと二人きりになろうと企みますが、自制心を失い、彼女を強姦します。その直後、アムノンはそれまで彼女を欲していたのと同じくらいに彼女を憎むようになり、彼女を通りに放り出します。人生を台無しにされた彼女は、兄アブシャロムの許に身を寄せます。ダビデはこの件に激怒しますが、個人的な理由から国家の諸事情のために、全く何の罰もアムノンに与えません。アブシャロムは妹の面倒を見ながら、アムノンへの憎しみを募らせ、彼との接触を避けていました。しかし2年後、アブシャロムは行

---

3 Moshe Halbertal and Stephen Holmes *The Beginning of Politics: Power in the Biblical Book of Samuel* (Princeton University Press, Princeton and London, 2017).

動を起こします。彼は羊の毛刈りの時に祝宴を催し、アムノンが他の王子たちと出席できるようダビデを説得します。そしてアムノンに酔いの回った頃合い、アブシャロムの直接の命令で、アブシャロムの従者たちがアムノンを暗殺します。私たちはアブシャロムの性格について最初の情報を得ることができました。彼は憎む術を知っており、並外れた自制心を持ち、長期的な戦略家であり、完全に冷酷になることができ、そして自らの汚れ仕事は、おそらくある程度の否認権を確保するために、他人にさせるということです。

ダビデの怒りから逃れるために、アブシャロムは、母の父であるゲシュルの王タルマイの許に逃がれ、そこに3年間留まります。この時点で、もう一人の重要な役者が登場します。ヨアブは、ダビデの有力で冷酷な軍司令官です。彼はダビデの忠実な支持者であり、ヘト人ウリヤが戦場で死ぬ手筈を整えた代理人です。しかし、ヨアブは、ダビデの行動が君主制を弱体化させる可能性があると思ったときは、ダビデに圧力をかけることも厭いません。ダビデがアブシャロムとの和解を望んでいることを見て取った彼は、入念な計画を駆使してダビデに息子をエルサレムに呼び戻させます。しかし、ひとたび戻ってくると、ダビデはやはりアブシャロムに会うことを拒み、さらに2年間、彼を蟄居させてしまうのです。

物語のこの時点で、聖書は後に重大な結果をもたらすことになる情報を少しだけ紹介しています。この物語の手法は、私たちが映画で慣れ親しんでいるものと同様です。カメラが一台の電話を捉えたカットがあれば、その電話が決定的な瞬間に鳴るとというのがお約束です。今、アブシャロムのスター性と特別な属性が語られているのです！

イスラエルの中で、アブシャロムほどその美しさを褒めそやされた者はなかった。足の裏から頭のとっぺんまで、非の打ちどころがなかった。彼はいつも、年の終わりに髪の毛を刈ることにしていたが、それは髪の毛が重くなるからであり、刈り落とした髪の毛は、王の量り石で二百シェケルもあった。(サムエル記下14：25-26)<sup>4</sup>

---

4 訳注：以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

【ネタバレ注意！】私たちはアブシャロムの髪の毛の壮観さを思い出すことになるでしょう。

ダビデへのお目通りがかなわないことに全く我慢できなくなったアブシャロムは、ヨアブにまたダビデに取り次いでくれるよう二度も頼みます。ヨアブが彼に会うことすら拒否すると、アブシャロムは家来たちにヨアブの大麦田に火を放たせ、当然ながらこれは彼の注意を引きます。そこでヨアブは、アブシャロムを王宮に招くようダビデを説得します。到着するやいなやアブシャロムはダビデの前にひれ伏し、王は彼に口づけをします。父と息子は再会し、一見和解したかのように見えてましたが、明らかにダビデのアブシャロムに対する扱いは腫れ物に触るようなものであり、それはやがて必然的な帰結を招くものでありました。

王位継承候補として、アブシャロムは自らの政治運動を始めます。聖書の記録では、このように王の息子たちが王位継承のために競う前例はありません。そこで、アブシャロム、あるいは彼の助言者たちに、政治指導者が自己宣伝に成功する最初のマーケティング戦略を発明した名誉を帰さなければなりません。どのようにして、彼は自分が適任であるという世間のイメージを確立できたのでしょうか？ まず、一台の戦車、馬、50人の護衛兵を整え、王族としての高貴さを宣伝し、ブランド認知を獲得しました。しかし、それだけでなく、大衆からの信任の確立にも力を注ぎました。華やかな王族としてだけでなく、困窮している人にとっても近づきやすい存在として自らを売り込みました。同時にその手法は、父の権威と彼の統治への国民の信頼を弱体化させるものでした。

彼は朝早く起きて城門への道の傍らに立ち、争い事を抱えた人が王に裁定を求めにやって来ると、誰にでも声をかけ、「どの町の出身か」と尋ねた。その者が、「僕はイスラエルの部族の一つに属しています」と答えると、アブシャロムはその人に向かって、「確かに、あなたの訴えはもっともで正しい。だが、王のもとには、あなたの訴えを聞いてく

れる人は誰もいないのだ」と言うのであった。また、アブシャロムは言った。「もし誰かが、私をこの地の裁き人にするならば、どんな争い事や申し立てを抱えた者が来ても、その人のために公平な裁きを行ってやれるのに。」さらに、誰かがアブシャロムに近寄ってひれ伏そうとすると、アブシャロムは手を差し伸べて彼を抱き、口づけをした。アブシャロムは、王に裁定を求めてやって来るイスラエル人すべてにこのように振る舞った。(サムエル記下15：2-6)。

聖書はこう結んでいます。

こうしてアブシャロムは、イスラエルの人々の心を盗んだ。(サムエル記下15：6)。

サムエル記には、ダビデ王がアブシャロムの振る舞いを懸念したという記録は何もなく、もしかすると実際、彼を正当な後継者を見なしていたのかもしれない。

数年後、アブシャロムは行動を起こす時が来たと判断しました。彼は、もし神が自分をゲシュルでの追放生活からエルサレムに連れ戻してくれたなら、ヘブロンで神を礼拝しますという何年も前にたてていた誓願を果たすために、ヘブロンに行く許可をダビデに求めました。ヘブロンはダビデ自身が最初に王として戴冠した町だったにもかかわらず、ダビデは予測され得る結果について懸念していなかったようです。アブシャロムはすべての部族に密使を送って言いました。

角笛の鳴るのを聞いたら、『アブシャロムがヘブロンで王になった』と宣言するように (サムエル記下15：10)

ヘブロンへのアブシャロムの同行者はエルサレムの200人の者で、彼らはおそらく信用して招きに応じ、何が起きようとしているのか気づきませんでし

た。おそらくその中には、こういうことさえなければダビデに忠実であり続けたかもしれないが、肝心なときに何もできない類の人々や、事態が悪化した時、人質に使いそうな者が含まれていたのでしょう。

いよいよ、このエピソードの中心人物であり、アブシャロムへの対照的な助言が反乱の最終的な結果を左右することになった二人の重要人物のうちの一人目が紹介されようとしています。アブシャロムはギロの町からギロ人アヒトフェルを連れてきます。彼はダビデ王の「ヨーエーツ」—「助言者」ないし「相談役」— [צוּר] という肩書きを持っていました。アブシャロムによって彼に与えられた権限をこの後に続くことから判断すると、アヒトフェルはすでに陰謀の立案から一役買っていたと理解できます。なぜそれほどの側近の者がダビデを裏切り、アブシャロムに協力することを選んだのでしょうか。聖書に直接的な答えはありません。唯一の手がかりは、家族がらみの理由の可能性を示唆するいくつかの付随的な節に求められます。ダビデ軍の勇士たちのリストの中に、ギロ人アヒトフェルの子エリアムという人物が出てきます（サムエル記下23：34）。そして、バト・シェバが最初に登場した時、彼女はエリアムの娘として描写されています（サムエル記下11：3）。もし、これがアヒトフェルの息子エリアムと同一人物であるならば、ダビデとバト・シェバの関係により家族にもたらされた恥辱が、アヒトフェルの一見唐突に思える背信行為の背後にあったのかもしれませんが。理由が何であるにせよ、アヒトフェルがアブシャロムを支持したことの重大な意味を私たちは間もなく知ることになります。

反乱の報はすぐにエルサレムのダビデに届き、この年老いた戦士は迅速に対応し、都からの戦略的撤退を行います。彼には廷臣たちと家族全員が加わり、彼は王宮を守るために10人の側女だけを残します。徒歩で都から出ていく途中、彼は自らの軍事資源を再確認しました。その中にはクレタ人とペレティ人が含まれており、彼らは王の近衛兵を務める傭兵でした。しかしさらに、ダビデがサウル王から逃れてペリシテの地に亡命していた時代に仲間であった600人の兵士も、とても感動的な支持表明をして加わりました。彼らのダビデへの忠誠は大変心動かされるものでしたが、その当時から長い年月が

過ぎていたので、彼らは年老いた寄せ集めの集団として現れたにちがひありません。もし映画の中であれば、昔の武具にどうにか身を包み、家族に別れのキスをして、出発する隊列に加わるべく進む彼らの様子が、さしずめどんなシーンになるだろうかと想像できるでしょう。

ダビデの一連の行為は、この劇的な情勢の変化に直面しながら、卓越した戦略的戦術と、神の前での深い謙遜が魅力的に混ざり合ったものでした。祭司ツァドクは、逃亡中の王と行動を共にすべく、契約の箱を運ぶレビ人たちと共に現れます。エルサレムにその箱のための住まいを作ることは、国の首都として、また神がその中心に顕現すべき場所としての都を築かんとするダビデの願望の絶対不可欠な部分でした。しかし、ある預言において、彼は自ら望んだその神殿の建立者になるべきではないと告げられていました。けれども、ダビデは以前の苦い経験から、契約の箱は、自らの個人的な目的の手段として利用されるべきではないことを学んでいたようです。それが彼の身近に在ればどれほどの神的な力が利用可能になるとしても、また、民にどれほど彼が依然として王であることを確証できるとしても、ダビデはそれを受け入れようとはしないのです。彼がツァドクに語った言葉は、ダビデと神との関係性の深さを私たちに思い出させる驚くべき霊的告白の一つといえます。

「神の箱を町に戻しなさい。もし、私が主の目に適うのであれば、主は私を連れ戻し、神の箱とその住まいを見せてくださるであろう。しかし、もし主が、『私はあなたを喜びとしない』と言われるなら、主がその目に適う良いことを私にしてくださるように。」(サムエル記下 15:25-26)

しかし、軍事戦略家であり、かつてはゲリラ闘士であったダビデは、まさに間髪を入れず、祭司ツァドクに自分がどこに行くつもりかを知らせます。

---

5 サムエル記下 6 章は、契約の箱をエルサレムに持ち込もうとするダビデの、不成功に終わった最初の企てから、彼が適切な敬意を払ってそれを取り扱うまでを詳述している。

それから彼は、祭司ツァドクとエブヤタルの息子たちをスパイおよび密使とし、彼の許へ密かに来て、何が起きているかについてエルサレムからの情報をもたらすよう手筈を整えました。

ここで初めてダビデは、アヒトフェルが共謀者の一人であることを知ります。個人的な裏切り自体もさることながら、彼がアブシャロムを支援したことによる危険の脅威度も加わり、大変な痛手であったに違いありません。その少し後で、語り手は次のような戦慄すべき情報を挿入しています。

その頃、アヒトフェルが提案する助言は、神に伺いを立てた言葉のように受け取られており、ダビデにとっても、またアブシャロムにとっても、アヒトフェルの提案はそのようなものであった。(サムエル記下 16:23)

今やダビデにできることは、神に祈ることだけです。

「主よ、どうかアヒトフェルの助言を愚かなものとしてください。」  
(サムエル記下15:31)。

そして、彼の祈りは、アブシャロムの心と行動を操り、ダビデの王位を救うための知力の戦いにおける、もう一人の重要人物の突然の登場によって、直ちに応えられたようです。彼の名はアルキ人フシャイといい、ここでは単にダビデの「友」(サムエル記下15:37)と表現されていますが、これは歴代誌によればより公的な職名のようなようです<sup>6</sup>。年老いた彼は、起こってしまったことに対する嘆きの象徴として、衣服を裂き、頭に土をかぶって、ダビデに挨拶に来ます。ダビデはフシャイの才能を高く評価していたにちがいません。さもなくば、単に藁にも縋る思いだったのでしょう。彼は言います。

---

6 歴代誌上 27 章 33 節において、フシャイもアヒトフェルも共にダビデ宮廷の官吏として公的な職名を伴ってリストアップされている。アヒトフェルは「ヨーエーツ ラン・メルフ」[「王の相談役」] [יְהוֹנָתָן לְמַלְכִּי] であり、フシャイは「レーア ハン・メルフ」[「王の友ないし話し相手」] [רֵעֵה הַמֶּלֶךְ] である。



あなたが私と一緒に来てくれても、私の重荷になるだけだ。町に戻って、アブシャロムに向かい、『王様、私はあなたの僕です。以前はお父上の僕でしたが、ただ今この時から、あなたの僕です』と言うのだ。そうすれば、私のために、アヒトフェルの助言を失敗させることができるであろう。(サムエル記下15：33-34)

ダビデはフシャイに、祭司の息子たちを使って情報を自分にもたらすことができるかと告げます。緊急時対応策を万全に整えて、ダビデの反撃が開始され、政治闘争は新たな局面を迎えます。聖書がこう記すように。

こうして、ダビデの友フシャイは町に戻り、ちょうどその時<sup>7</sup>アブシャロムもエルサレムに入った。(サムエル記下15：37)

さて、ダビデはうなだれ、涙を流しながら、人生の終盤に二度目の国外逃亡の旅に出ようとしています。私たちはいったん離れましょう。エルサレムで、アヒトフェルとフシャイの論戦が始まろうとしています。

アヒトフェルはアブシャロムに対して、記録に残っている最初の助言をします。彼は、直接的な性的意味合いを持つ動詞「来る」の命令形を使って、こう語ります。

お父上の側女たちのところにお入りになるのがよいでしょう。お父上は、王宮を守らせるために側女たちを残しておられます。あなたがあえてお父上に憎まれるようなことをしたと、イスラエルのすべての人々が聞けば、あなたにくみするものは皆、奮い立つでしょう。(サムエル記下16：21)

---

7 訳注：「ちょうどその時」は講演者の英訳による。

この助言は、残酷なほど論理的で、実用的かつ効果的です。象徴的にそれは、アブシャロムが先王の地位を奪ったことを意味します。これはアブシャロムのクーデターが現実的で、変更できない最終的なものであることを人々に確信させることが目的です。しかしこうすることでアヒトフェルは、アブシャロムが着手したことから後戻りしないことも確保しました。聖書は単にこう記しています。

そこで、アブシャロムのために屋上に天幕が張られ、イスラエルのすべての人々が見守る中で、アブシャロムは父の側女たちのところに入った。(サムエル記上16:22)。

今こそ真の知力の戦いが、ダビデ王による脅威をいかにして除くかについて、アブシャロムの陣営内での論戦を以て始まろうとしています。しかし、フシャイはまず、恐らくは裂かれた衣服を着替え、頭から土を落とした上で、アブシャロムの信頼を得なければなりません。聖書本文〔16:16〕は、フシャイを「ダビデの友」と呼ぶ冒頭の言葉によって、これがいかに困難であるかを示唆しています。ダビデはフシャイに一般的な方法を伝えていましたが、今フシャイはアブシャロムの明らかな疑念を解かなければならないのです。彼はこう始めます。

「*イェヒー ハン・メレフ! イェヒー ハン・メレフ!*」〔יהי המלך יהי המלך〕

「王様、万歳。王様、万歳」(サムエル記下16:16)

しかし、アブシャロムは余りにも政治家であり過ぎるため、説得は容易ではありません。おそらく、彼がここで尋ねる質問には、政治的な選択をしなければならない際の個人的関係の脆さについての若干の関心も含まれているのでしょう。彼は尋ねます。

「友に対するあなたの誠実さというのは、この程度のものにすぎないのか。なぜ、あなたの友に付いて行かなかったのか。」フシャイはアブシャロムに言った。「いいえ、断じて！ 神と民と、イスラエルのすべての人々が選んだ方と共に、ロー エフイエ ヴェ・イットー エーシェーヴ [לא אהיה ואחרו אשב] 彼と共に私はあり、彼と共に私はとどまります。」<sup>8</sup>(サムエル記下16：17-18)

この時点で、ヘブライ語本文にある曖昧さを指摘しておく必要があります。それはフシャイの言葉が口で語られた時には気づかれないかもしれませんが、書かれた記録には存在します。「ロー エフイエ」[לא אהיה] という句にあるヘブライ語の単語「ロー」には、二通りの綴りがあり得ます。「ラーメド・アレフ」[לא] と書かれたときは「ない」を意味し、「私は ない でしょう」と訳されることとなります。しかし、「ラーメド・ワウ」[ו] と書かれたときは、「彼に」の意味となります。このヘブライ語本文は、実際に「ない」[לא] と書かれており、あたかもフシャイが実際に「神に選ばれた者（アブシャロムを指す）に対して、私は忠誠を尽くしません！」と言ったかのようです。しかし、マソラの伝統は両方の形を保存し、それ [לא] を「彼に」[ו]、つまり「**彼にこそ** 私は忠誠を尽くします」と読み変えるよう指示しています<sup>9</sup>。この区別は、結局のところ、何らかの正字法上の不確かさの結果なのかもしれません。しかし、この二つの選択肢の中に、少なくとも読者にとっては、フシャイの個人的な偽装を言外にほめかすものを見ないわけにはいきません。この決定的な瞬間に、彼は真に「権力に対して虚偽を語」っているようです。

フシャイは自らの論理的な正当化を続けます。

8 訳注：フシャイの言葉は講演者の英訳による。協会共同訳では「いいえ、私は、主とここにいる民と、イスラエルのすべての人々が選んだ方に従い、その方のもとにとどまろうと思います。」となっている。

9 訳注：ヘブライ語聖書では、マソラ（伝承）本文にロー「ない」[לא] が書かれており（ケティーフ）、側欄外（マソラ・バルヴァ）に読まれるべき（ケレ）単語としてロー「彼に」[ו] が記されている。

「それ以外に、私は誰にお仕えすればよいでしょうか。そのご子息以外にありえましょうか。お父上にお仕えしたように、私はあなたにお仕えます。」(サムエル記下16:19)。

アブシャロムがフシャイの信頼性に十分納得して彼を受け入れたかどうかは、これから判断しなければなりません。おそらく彼はこのような大人物から王と呼ばれ、支持されたことに満足しているでしょう。

さて、今度はアヒトフェルが単純だが、十分考え抜かれた実用的計画を提案する番です。それは簡潔に語られています。

私に一万二千の兵を選ばせてください。私は今夜にも出発してダビデを追跡して、急襲します。ダビデは疲れて力を失っているところですから、恐怖に陥れることができます。彼と一緒にいる民は皆逃げ出すでしょう。私は王だけを討ち取ります。……私は民のすべてをあなたのもとに連れ戻します。あなたの捜している人物を除くすべての者が<sup>10</sup>戻って来れば、民のすべてが平和になるでしょう。」(サムエル記下17:1-3)

アヒトフェルの締めくくりの言葉の部分は、ヘブライ語本文では少し混乱していますが、彼の計画は明確です。ダビデを孤立させ、殺すのです。アヒトフェルは、巻き添え被害がないようにしながら、ピンポイント攻撃を考案しているのです。

この言葉は、アブシャロムにも、イスラエルの長老全員の目にも適う正しいものと思えた。(サムエル記下17:4)

---

10 訳注：「あなたの捜している人物を除くすべての者が」は講演者の英訳による。協会共同訳では「あなたの捜しているすべての者が」となっている。

しかし、何かがアブシャロムを不安にさせたようで、彼はセカンドオピニオンを求めることを決めるのです—それもフシャイから。聖書本文には、この決断の理由は何も書かれていません。信心深い読者は、ここにダビデの祈りに応じて介入した神の御手を見るかもしれません。しかし、ダビデを倒すともなれば当然ともいえる警戒心を含め、アブシャロムに影響を及ぼすもつと個人的な要因があるのかもしれません。おそらく彼がフシャイの助言を求めた理由は、フシャイがダビデの親しい友人であり、ダビデがどう反応するかについて見解を持っていると思ったのでしょう。他方、「イスラエルの長老たち」の合意が、アブシャロムに何らかの疑問を投げかけた可能性はあるかもしれません。実際、フシャイの提案を最終的に支持するのは、長老たちではなく、別のグループの人々なのです。

アブシャロムはフシャイを呼び、アヒトフェルの計画を伝え、こう結びました。

「我々は彼の助言に従うべきか否か。他ならぬあなたが語ってみせよ！」<sup>11</sup> (サムエル記下17:6)

これはフシャイにとって好機であり、彼は聴衆たちの固定観念を見事に刺激します。アヒトフェルは厳密で現実的な軍事的論理を用いていましたが、フシャイは別のレベルで働きかけます。おそらく、彼は感情的知性の性質を認識し、それを操作する方法を知っていると評価されて然るべきです。

彼は、アヒトフェルによる「疲弊し軍事的に弱体化した」ダビデ〔像〕とは非常に異なるイメージを描くことから始めます。代わりに、彼は英雄的な王、彼の忠実な軍隊、および彼らがもたらす軍事的脅威についての通俗的伝説を刺激します。彼はこのように口火を切ります。

---

11 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「そうすべきだと思うか。反対があるなら言ってみよ」となっている。

「アヒトフェルの申した提案は、今度ばかりは良いと思えません」  
(サムエル記下17：7)

彼の発言に対して何らかの騒動が起こったに違いありません。なぜなら、著者はもう一度「まもなくフシャイは言った」<sup>12</sup>という言い回しを挿入し、事態が落ち着くまで再開するのを待っていたことを示唆しているからです。今、彼はアブシャロムに直接向けた最初のメッセージで急所を突きます。

「アッター・ヤーダター」[אתה ידעת]「あなたの父上とその部下の者たちが勇士であることは、他の誰よりもあなたこそが<sup>13</sup> ご存じです。彼らは野にいる子を奪われた雌熊のように気が荒くなっています。その上、あなたの父上は戦上手な方ですから、民と一緒に夜を過ごすことはなさらないでしょう。今頃は、洞穴の中かどこかに身を隠しておられることでしょう。もし、最初の攻撃で倒れる者が出れば、それを聞いた者は、アブシャロムに従う兵が打ち負かされたと考え、獅子のような心を持つ勇者でも、気が挫けてしまいます。あなたの父上が戦上手であり、彼に従う者も勇者であることは、イスラエルのすべての人々が知っているからです。」(サムエル記下17：8-10)

彼は、ダビデとその部下たちの伝説的な軍事力について力強いイメージで語り始め、締めくくります。しかしその間の部分では彼は、ダビデの戦術的スキルを認めながらも、地の穴にこそそそ隠れていると否定的に描写しています。

これまでのところ、フシャイは、ダビデを捕らえることは容易であるとのアヒトフェルの確固たる説明を弱体化させています。何年にもわたってサウルから身を隠し、決して捕らえられることはなく、軍事的成功により王とし

---

12 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「こう続けた。」となっている。

13 訳注：「他の誰よりもあなたこそが」は講演者の英訳による。協会共同訳では「あなたも」となっている。

での地位を獲得した年老いた戦士は、単純な標的にはなりそうもありません。アヒトフェルが示唆するように、ダビデを孤立させて殺すことはおそらく成功するかもしれませんが、それは彼の支持者の多くを生きたまま残すことになり、新体制にとって重大な危険となり得ます。また、フシャイは、サムエル記においてダビデの心を占め、繰り返し表明された、神によって油そそがれて王となった者は殺されてはならない—だからこそダビデは二度もサウル王の命に危害を加えなかった—というあの考えを用いて効果を生み出している可能性もあります<sup>14</sup>。神がダビデの死にどのように反応するかを誰が知っているでしょう。アヒトフェルには彼なりの冷静な論理があるかもしれませんが、イスラエルの神は軽々に怒らせるべきではないのです。

これまでのところ、フシャイは必要な情報を提供しているだけです。以下において、彼はアブシャロムの中に見抜いた潜在的な弱点に付け込んでいるようです。彼は、ダビデと彼のすべての支持者をまとめて一掃するために圧倒的な軍事力を集結させるという、一見したところ、[アヒトフェルと]同じように論理的な戦略であると思われるものを提案します。

「そこで、私の提案はこうです。何よりもまず、あなたのもとにイスラエルの全軍を集結させることです。ダンからベエル・シェバに至るまで、海辺の砂のように、多くの者を集結させ、その上であなたご自身が戦いに出られることです。お父上を見つけたら、我々は露が地に降りるように、その場所に襲いかかることができます。共にいる者たちも、一人も残ることはないでしょう。もし、お父上がどこかの町に立てこもるなら、イスラエルの全軍はその町に縄をかけ、川まで引きずって行き、小石一つそこに残らないようにしましょう。」(サムエル記下17：11-13)

その反応や如何に。

---

14 サムエル記上 24：7, 11：26：9, 16, 23。

アブシャロムは言った。そしてイスラエルの兵士も皆。アルキ人フシャイの提案はアヒトフェルの提案より優れていると。(サムエル記下 17:4)<sup>15</sup>

もちろん、フシャイの計画は、ダビデに対する追跡を可能な限り遅らせることで、ダビデが部隊を再編成し、軍を召集し、反撃を計画する機会を得るためでした。しかし、なぜアブシャロムの説得に成功したのでしょうか。フシャイが付け込んだと思われるのは、アブシャロムの虚栄心です。すなわち、彼の自慢の美しさ、見事な長髪、戦車、馬と護衛兵たち、計算ずくの大衆を惹きつける力です。何よりも、アブシャロムはどのようにアヒトフェルにダビデを捕らえて殺すという誉れを持たせることができたのでしょうか。軍事的英雄こそが、記憶に残り、国民の尊敬と称賛を受け続ける者だからです。今まさにこの地域にひしめく大軍事勢力の一つの最高司令官になりなるとするアブシャロムについて、これまでに戦闘に参加してきたという証拠は聖書中に全くありません。ですからアブシャロムが、国の隅々から集められたこの強力な軍隊の陣頭に立つ人物であるべきで、彼がダビデを打ち負かしたという称賛を手にしなければなりません。確かに彼は、ダビデの名声が確立されたその〔ほかならぬ軍事〕分野で父親を打ち負かすでしょう。どんな歌が、サムエル記で三度繰り返される「サウルは千を討ち／ダビデは万を討った」のように歌われるのでしょうか<sup>16</sup>。人々は今、アブシャロム王について何を歌うのでしょうか。

ここで、二つの異なる助言の受け止められ方について、考慮すべきもう一つの要因があります。アヒトフェルの計画の場合、聖書は、それが「アブシャロムの目にもイスラエルの長老たちの目にも適う正しいもの」と思われたと指摘しています。おそらく諸部族の古くからの指導者を代表する「長老

---

15 訳注：講演者の英訳による。協会共同訳では「アブシャロムも、イスラエルの兵士も皆、アルキ人フシャイの提案はアヒトフェルの提案より優れていると思った。」となっている。

16 サムエル記上 18:7:21:12:29:5。



たち」は、共同決定として王と一緒にそれを支持し終わっています。しかし、フシャイの計画に対する反応には、異なる聴衆と反応の仕方があります。

アブシャロムは言った。そしてイスラエルの兵士も皆… (サムエル記下17:14)

いわば、長老たちは部屋を出て行ってしまい、見解を述べるのはアブシャロムであり、出席している人々は単に彼に同意するのみです<sup>17</sup>。おそらくそれは、アヒトフェルの計画に対する「長老たち」の支持でさえあり、彼らの賢明な助言を受け入れなければならないことへの焦りが、アブシャロムにセカンドオピニオンを求めさせた要因の一つでした。

以下に続くことは、ある程度の必然性を持っています。フシャイは自分の助言とアヒトフェルの助言を例の祭司たちに報告します。彼らの2人の息子は、アブシャロムの部下に捕まりそうになりながらも、その情報をダビデにもたらしめました。彼らはまた、万が一アヒトフェルの計画が採用され、アブシャロムの部隊がダビデを捕まえるようなことがあってはいけないので、ダビデは今いる所に留まるべきではないという、フシャイの警告を伝えていません。緊急な夜の作戦行動で、ダビデと彼の部下全員が脱出します。再編成がなされ、ダビデは集めた軍隊の指揮官にヨアブを含む3人を任命し、それから束の間の短い内戦が後に続き、ダビデ軍が勝利します。

物語の悲劇的な結末で、ダビデが何を差し置いてもアブシャロムを愛していた度合いが初めて明らかにされます—それがアブシャロムの諸計画に対して彼を盲目にしていたのかもしれませんが。ダビデは全軍に、アブシャロムを生きのまま捕らえ、傷つけないように命じます。戦いに敗れ、アブシャロムは森の中をラバに乗って逃げ、ラバが移動する際、彼の頭と髪は木の枝に引っ掛かってしまいます。聖書が描写しているように、彼は天と地の間に宙

---

17 訳注：ヘブライ語本文ではヴァッヨーメル「そしてそれから彼は言った」[וַיֹּאמֶר]と動詞の主語が三人称単数であり、アブシャロムしか発言していないことを示唆している。

づりとなりました。一人の兵士が彼を見つけ、ヨアブに知らせると、ヨアブは、なぜアブシャロムを殺さなかったのか尋ねました。しかしその兵士は、ダビデがアブシャロムを寛大に扱うようにとの命令を下したからには、ダビデの逆鱗に触れるという危険を冒したくないと主張しました。これまで君主制に関する限り現実主義者であるヨアブは、アブシャロムが生きている限りダビデにとって絶え間ない脅威になることをよく分かっていたので、彼を槍で突き刺し、10人の従者が彼の息の根を止めます。彼らは遺体を穴に投げ込み、その上に石を積み上げて塚を作りました。

誰がその報せをダビデ王に伝えるべきかについて、ほとんど滑稽な議論が熱を帯びます。彼が最終的にその情報を受け取ると、彼はすっかり泣き崩れ、大声で嘆き悲しみます。

「わが子アブシャロムよ、わが子よ、わが子アブシャロムよ。私がお前に代わって死ねばよかった。アブシャロム、わが子よ、わが子よ。」  
(サムエル記下19:1)

ダビデの君主制の運命が危機に瀕しているのです。ヨアブは、この弱さの露呈に激怒して、ダビデを、その振る舞いが彼に忠誠を示した兵士たちの払った犠牲を侮辱していると非難します。

「あなたは自分を憎む者を愛し、あなたを愛する者を憎まれるのです。」  
(サムエル記下19:7)

ヨアブは、ダビデが反乱自体で失った以上に、この態度によってより多くの人々を失う危険を冒した、と主張しました。ヨアブに追い立てられて、ダビデは、自分の個人的な苦悶を脇に置き、王としての義務を果たしました。彼は城門の席につき、兵士たちは彼がそこにいると聞いて、集まって王を拝しました。

何が起こっていたのかについての注解を提供する二つの聖書本文があります。一つは、著者あるいはおそらく後代の編集者に由来するもので、ダビデが首尾よくアヒトフェルを打倒した理由を神の御手にしっかりと帰しています。

これは主がアブシャロムに災いを下そうとして、アヒトフェルの優れた謀を打ち壊そうと決めておられたからである。(サムエル記下17:14)

二つ目は、アヒトフェルの運命を取り上げています。アブシャロムのために計画を立てたのと同じ妥協のない論理で、アヒトフェルは、もしフシャイの計画が受け入れられたならば何が起こるかを正確に予見していました。アブシャロムは敗れ、ダビデは必然的にアヒトフェルと彼の家に報復するでしょう。それ故、彼はそれらを保護するために必要な措置を講じました。非常な簡潔さと一私は主張したいのですが一相当な敬意で以て、聖書は彼の墓碑銘を提供しています。

アヒトフェルは自分の提案が実行されなかったことを知ると、ろばに鞍を置いて出発し、家に帰ろうと自分の町に向かった。彼は自分の家を整理して、首をくくって死んだ。そして、自分の父の墓に葬られた。(サムエル記下17:23)。

以下は、〔講演を〕締めくくるためのやや悲観的な覚書です。私はこの講演を書いているとき、サムエル記に記録されていることと反響しているかもしれない現代の出来事や人物について考えずにはいられませんでした。私は、「故人も含め実在の人物または出来事とのいかなる類似性も、まったくの偶然です」と断り書きを加えたくなるほどでした。しかし、サムエル記をヘブライ語聖書に保存する目的は、そのような断り書きとはまさに正反対です。キリスト教側の聖書では、サムエル記はルツ記、歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記のような書と一緒に分類されており、この分類化がいかなる歴史観を含

意しているかはさておき、それらは歴史的記述と見なされていることを示しています。しかし、ヘブライ語聖書ではサムエル記は、士師記、イザヤ書、エレミヤ書、ヨナ書などと共に、「ネヴィーイーム」「預言者たち〔預言書〕」〔נביאים〕という標題の下に分類されるものに属しています。それ〔標題〕は、それら〔各書〕が未来を予言していることを示唆するものではなく、むしろ、それらは、そこに描写されている出来事について神的な視点を提示し、神が見ているかも知れない通りに出来事を評価しようと試みているということを示唆するものです。したがって、それらは時間に縛られた視点と時代を超越した視点の両方を提供し、どんなときでも、私たちの周りの世界で起こっていることを測定し、解釈するのに役立つものです。

ヘブライ語聖書では、人間の活動のどんな側面も考慮から除外されることはありません。サムエル記は、他に何をそれが提供しているにしても、人間の共同体での私たちの人生の本質と生活の質を共に下支えする政治的構造と行動にも焦点を当てています。アブシャロムのような人たちはどこにいても、受容と承認に対する自らの飽くなき要求に突き動かされ、羨望を抱き、自らの価値を自らに証明するために権力を切望することでしょう。アムノンのような人たちは、特権的な地位が自らに裁きや罰を免れさせると信じることでしょう。タマルのような人たちは、社会が見て見ぬふりをするところではどこでも、性的虐待やその他の形態の虐待を受けやすくなるでしょう。アヒトフェルのような人たちは、その目標が人類の利益のためであろうと破滅のためであろうと、自分を一番高く買ってくれる人に自らの知的スキルを提供するでしょう。ヨアブのような人たちは、正当化されようとされまいと、権力機構を暴力で支え、守ろうとするでしょう。フシャイのような人たちは、忠誠心と誠実さ故に、困っている友人を守るために自らの命と評判を危険にさらすでしょう。そしてダビデのような人たちは、社会の重荷を最高レベルで担うという個人的な使命を果たそうとする一方で、自分自身の内なる悪霊や、権力につきものの誘惑と格闘することでしょう。

ヘブライ語聖書のこれらの物語は、私たちが学びたいと思うなら、私たちを楽しませ、教示し、警告するために、いつもそこにあるのです。ラビたちがこう教えてきたように。

ハフオーフ バーツ ヴァ・ハフオーフ バーツ デホーツラー ヴァーツ

[הפך בה והפך בה דכלא בה]

「それをひっくり返して探せ。それをひっくり返してまた探せ。なぜならすべてがその中に入っているから。」(ピルケ・アヴォート5：25)<sup>18</sup>

---

18 訳注：講演者の英文による。なお『ピルケ・アヴォート』にはナンバリングの異なる多くの版があり、この章節番号も講演者による。前後の文脈を含んだ邦訳については長窪専三訳『ユダヤ古典叢書 Mishna IV 別巻 アヴォート』（教文館、2010）、124頁〔5：22〕も参照せよ。